

# 東京学芸大学 国語教育学会

## 『サーカスのライオン』(川村たかし)における 深い読みを促す指導アプローチ



宮崎大学 中野登志美

# 『サーカスのライオン』における子どもの読みの課題

## ① 教師の問いかけ

「どうして、じんざは炎の中に飛び込んで、男の子を助けたのか。」

## ①に対する子ども達の読み

「じんざが男の子を助けたのはチョコレートをもらったから。」

## ② 『サーカスのライオン』のクライマックスの場面の子ども達の読み

「男の子を助けるために命を落としたじんざがかawaiiそう。」

子どもの①と②の読み方は「誤読」といえる

## 子どもの読みを「誤読」と捉えた理由①

(1) じんざは炎の中から男の子を助けたのは、チョコレートという物(物体)のためではなく、男の子が、

① 数ある動物の中でもライオンが好きなこと

② 体力・気力を失っているじんざを思いやる優しい気持ちを持っている



じんざにとって男の子は大切な存在になっている

- ・(男の子と出会ってから)眠らずに、毎日男の子が来るのを待っている
- ・男の子の話を身を乗り出してうなずいて聞いたりする
- ・じんざは好きではないチョコレートを喜んで受け取る

(男の子がチョコレートを渡すのは、じんざに対する思いやりや優しさの行為であることを、じんざは理解している。だから好きではないチョコレートを受け取っている)

## 子どもの読みを「誤読」と捉えた理由②

(2) 「男の子を助けるために命を落としたじんざがかわいそう。」

〈本文〉

ほのおはみるみるライオンの形になって、空高くかけ上がった。  
ぴかぴかにかがやくじんざだった。もう、さっきまでのすすけた色ではなかった。  
金色に光るライオンは、空を走り、たちまちくらやみの中に消え去った。

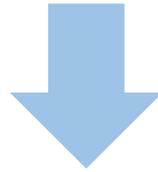
- ・「すすけた色」ではなく、「ぴかぴかにかがやく」金色に光るじんざ  
→自分の命を落しても、男の子を救い出すことができた満足感・達成感の表れ  
→じんざは(自分を)かわいそうだと思っていない。

小学3年生の子どもは、同じような年齢の「男の子」と同化して読む傾向が強い

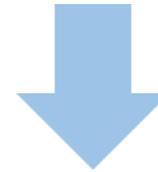
「男の子」と同化して読む



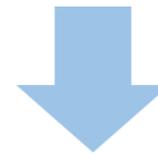
自分の経験に基づいて読む



作品(教科書)の文章に書かれていることに目を向けることなく、  
自分の経験だけで作り上げた読みは、恣意的な読み(誤読)になる



作品(教科書)の文章に目を向かせる = 作品の特性(特徴)に気づかせる



小学3年生の子どもは同化して読む傾向が強いので、もう一つの別の作品を  
読むことで、相対的・多面的な視点から読むことができる比べ読みを取り入れる

## 比べ読みの意義

読書の醍醐味はシントピカル読書(注・比べ読み)に尽きる。  
(中略) **真の主体性を確立し新しい価値を生み出しながら  
生きていく力**として、教育がぜひ用意しておかなければならぬ  
技術である。ここに至るまでの力を、一人一人の学習者に  
どこまで保障できるかが、**読むことの教育に課せられている  
最大の課題**である。

**複数の作品を関連づけて読む力の育成の大切さ**

## 大村はまの比べ読みの見解

一つの作品に対して他の作品を重ねて読むことによって、それぞれの作品がはっきりとわかっていくというわけです。ですから、大変簡単なことなのです。教師が一番骨を折りますのがその作品の選定であるわけです。

比べ読みによって作品と作品を関連づけて読むことができる

二つの作品を比べて読むことで、それぞれの作品の共通点と相違点を把握することができる  
一つの作品を読んだだけでは気づかなかったことを発見したり、二つの作品を結びつけて考えたりすることができる

## 比べ読みの有用性(一部抜粋)

- ・比べ読みによって、**読みの観点をもつ**ことができ、**読み方が焦点化**されて、**より理解を深められる**。
- ・比べ読みによって、**客観的・多面的・総合的に考えることができる**  
＝**複合的にとらえることで客観的な視点をもつことができる**
- ・比べ読みによって、**批判力の基礎を養うことができる**  
＝**複数のテクストを読むことで、複眼的に思考することが可能になり、批判力を育成することにつながる**。

## 比べ読みの課題点

① 比べ読みをするための作品を選定するのが難しい



同じ作者の作品の比べ読みだと物語の内容に重点が置かれるようになり、**作品の構造に目が向けられにくい**

② 二つの作品を比べて読むための時間がない



**比較的短い物語を選定することで、時間を確保**

①と②の条件を満たす『よだかの星』(絵本 **アニメーション**)を比べ読みとして選定

「きつずちゅーぶ」が作成した『よだかの星』を選定(約7分間)(YouTubeに公式アップロードしている)

## 宮沢賢治『よだかの星』

『よだかの星』は、小学校(5・6年生)・中学校・高等学校の教科書に採録されていた  
(牛山恵実践では小学1～4年生の子ども達の『よだかの星』の感想文が記載されている)



現在は、高等学校の「新編言語文化」の教科書(第一学習社)に採録されている

わたしも、何かで気もちがくじけそうなとき、よだかがどんな思いで、空にのぼっていったのか思い出して、せ中をぴんとのぼしてがんばって行こう  
と思います。  
(小学2年生の感想文)

牛山恵(2003)「子どもが読む『よだかの星』—擬制を撃つ—」(『日本文学』第52巻第3号、日本文学協会から引用)

## 『サーカスのライオン』と『よだかの星』の共通点(作品の構造)

### 『サーカスのライオン』

じんざが男の子を救い出すために炎の中に飛び込む場面

### 『よだかの星』

よだかは罪意識(食物連鎖による生きるためには逃れられない宿命)から解放されるために、「遠くの空の向こうに行ってしまうおう」と天空へ飛翔する決意をする

受動的な「ある」存在から、能動的な「なる」存在へと変化する

中心人物(じんざ・よだか)が主体的に行動することによって、中心人物は大きく変容する  
(中心人物が大きく変容するところがクライマックスの場面にあたる)

## 『サーカスのライオン』と『よだかの星』の共通点(物語の内容)

### 『サーカスのライオン』

じんざはサーカス(小屋)にいる



かつていたアフリカの草原を走ったり、アフリカの家族に再会することを夢見ている

(野生のライオンとして生きることをあきらめている)

### 『よだかの星』

・鷹から「市蔵」という名前に改名することを強いられる (「市蔵」=鳥らしくない名前)

・醜い容貌のために鳥たちに蔑まれる

(鳥の世界で生きることができない)

「本来居るべき居場所の喪失」・「現実から解放されたいという願い」

## 『サーカスのライオン』と『よだかの星』の共通点(物語の内容)

### 『サーカスのライオン』

サーカスにいるじんざは、男の子が抱いているひとりぼっちの孤独感や寂しさを自分と重ねている



火災で命を落したら、男の子は自分のように再び家族に会うことができなくなる

「男の子をなんとしても救い出したい」という思い

### 『よだかの星』

自分の罪意識(食物連鎖)を感じて「ぼくはもう虫を食べずに、飢えて死のう」と決意する



逃れられない境遇(宿命)から生み出される弱者の気持ちを理解できた

自分が犠牲になって命を落すことになっても「他者を救いたい」という思いがある

## 『サーカスのライオン』と『よだかの星』の共通点(物語の内容)

### 『サーカスのライオン』

(男の子を救出した後)じんざは、ライオンの形になって、空高くかけ上がった。ぴかぴかにかがやくじんざだった。金色に光るライオンは空を走り、たちまちくらやみの中に消え去った。

### 『よだかの星』

(よだかは)なぜだか心はとても穏やかでした。  
(※教科書の文章では、「心持ちは安らかで少し笑っていた」とある)

自分の体が青く美しい光に包まれて、静かに燃えているのに気がつきました。  
みにくかったよだかはきれいな星になったのです。  
今でも美しい星となって燃え続けているのです。

「悲願の達成」(じんざは男の子を救出できて、よだかは美しい星になったことで安らかな心情で少し笑っている)  
「達成感や満足感を表す色」(じんざはぴかぴかに輝く金色、よだかは青く美しい光の色に包まれている)

## 『サーカスのライオン』と『よだかの星』の共通点(物語の内容)

### 『サーカスのライオン』

(火の輪をくぐりぬけるじんざは死んでしまったのに)おじさんは五つの火の輪を用意して、一人で、チタッとむちを鳴らした。

それでも、お客は一生けん命に手をたたいた。



サーカスのおじさんや観客の心の中でじんざは生きている

### 『よだかの星』

寒さや霧がまるで剣のようによだかを刺しました。  
(中略)そうです。これがよだかの最後でした。  
(中略)しばらくたって眼を開いたよだかは、燐(りん)の火のような青い美しい光になって、静かに燃えているのを見ました。  
(中略)いつまでもよだかの星は燃え続けました。



死後、青い美しい光に包まれた「よだかの星」となり、燃え続ける

「死からの再生」 (じんざはサーカスのおじさんや観客の心の中に生きている。よだかは「よだかの星」へと生まれ変わる。)

# 『サーカスのライオン』と『よだかの星』の比べ読みの課題

## 〈作品の構造〉

- ・中心人物が主体的に行動することで、中心人物は大きく変容する(クライマックスの場面)

## 〈作品の内容〉

- ・「本来いるべき居場所の喪失」・「現実から解放されたいという願い」・「他者を救いたい」  
「悲願の達成」・「達成感や満足感を表す色」・「死からの再生」



宮崎県の公立の小学校(小学3年生が対象)で『サーカスのライオン』と『よだかの星』の比べ読みの実践をしたが、あまりうまくいかなかったという報告を受けた。



小学3年生にとって、『よだかの星』は難しい内容の作品だったのではないだろうか。(推測)

# 『サーカスのライオン』と『よだかの星』の比べ読みを成り立たせる指導アプローチ(小学校)

## ★教師の「問いかけ」がポイントになる

二つの作品の共通点の「達成感や満足感を表す色」に着目させる

(例)→「中心人物のじんざとよだかは、自分で行動した後どんな色に変化したと書いているかな？」



「じんざ」・・・すすけた色→**ぴかぴかに輝く金色** 「よだか」・・・味噌をつけたような色でまだらがある  
→**青い美しい光の色**

「じんざ」も「よだか」もかわいそうではなく、**自分の行いに満足している**ことが示されているとわかる

「色」に着目することで、自分の経験だけで作り上げた恣意的な読みを避けられて、  
「色」に着目して読むという〈読みの方略〉を学ぶことができる

## 『サーカスのライオン』と『よだかの星』の比べ読みを成り立たせる指導アプローチ(中学校・高等学校)

### 〈中学校〉

「読書・第3学年」(中学校学習指導要領)

「自分の生き方や社会とのかかわり方を支える読書の意義と効用について理解すること」



比べ読みによって、**複合的にとらえることで客観的な視点をもつことができ、  
批判力の基礎を養うことができる**

読書をすることの意義と効用を理解できる

### 〈高等学校〉

「『読むこと』の言語活動例」(「言語文化」/高等学校学習指導要領)

「異なる時代に成立した随筆や**小説、物語などを読み比べ、それらを比較して論じたり  
批評したりする活動**」

高校生にとって、『よだかの星』を深く理解するための**比べ読みの作品**として、『サーカスのライオン』は有効になる

# 『サーカスのライオン』の作品構造を生かした 深い読みを促す指導アプローチ



# 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進

小学校学習指導要領の「読むこと」の指導事項

- ・**構造**と内容の把握

中学校学習指導要領の「読むこと」の指導事項

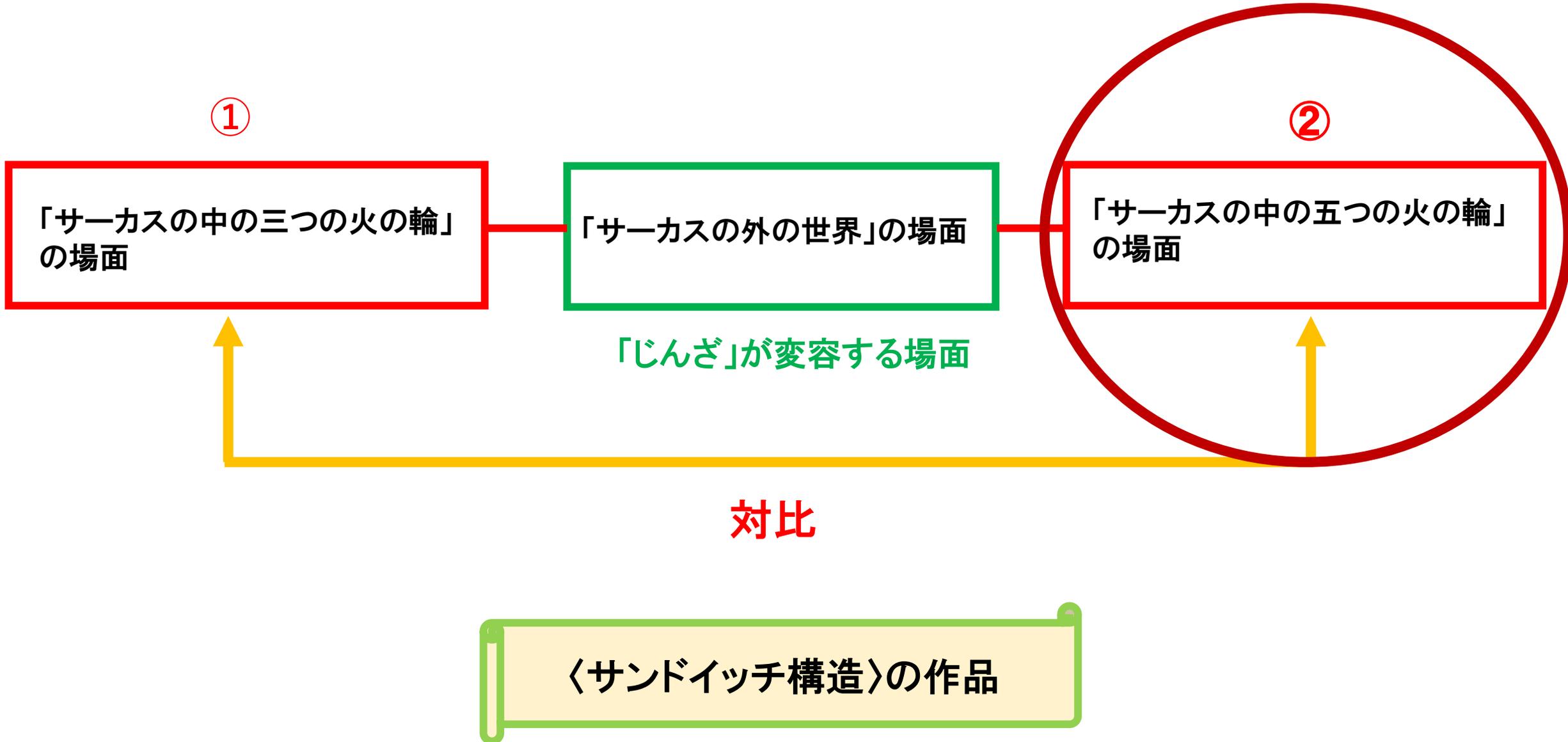
- ・**構造**と内容の把握

高等学校学習指導要領(「言語文化」)・(「文学国語」)の「読むこと」の指導事項

- ・**構造**と内容の把握

作品の内容だけではなく**作品の構造を把握**することが「**深い学び**」になる

# 『サーカスのライオン』の作品構造



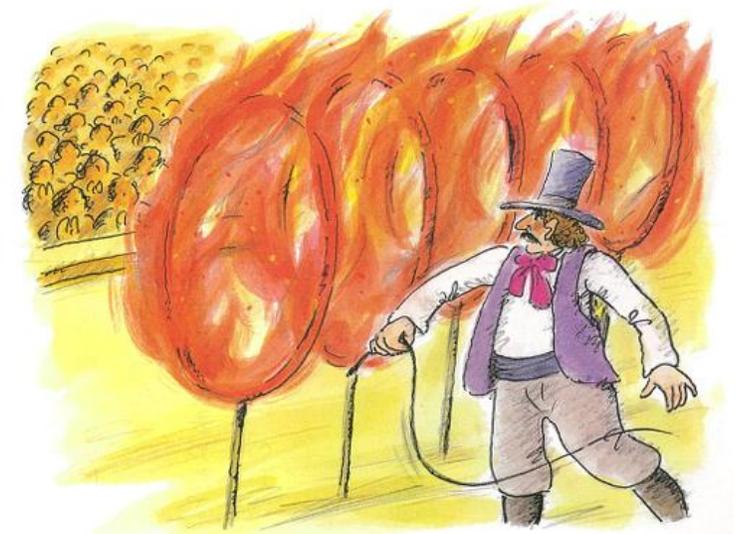
〈教科書のてびき〉 サーカスのおしまいの日、ライオンつかいのおじさんはなぜ五つの火の輪を用意したのか、お客はなぜ手をたたいたのか、考えましょう。

「新編新しい国語三下」(平成30年版)の最後の場面の挿絵

次の日は、サーカスのおしまいの日だった。けれども、ライオンのきよくげいはさびしかった。おじさんは一人で、チタツとむちを鳴らした。

五つの火の輪はめらめらともえていた。だが、くぐりぬけるライオンのすがたはなかった。それでも、お客は一生けん命に手をたたいた。

ライオンのじんざがどうして帰ってこなかったかを、みんなが知っていたので。

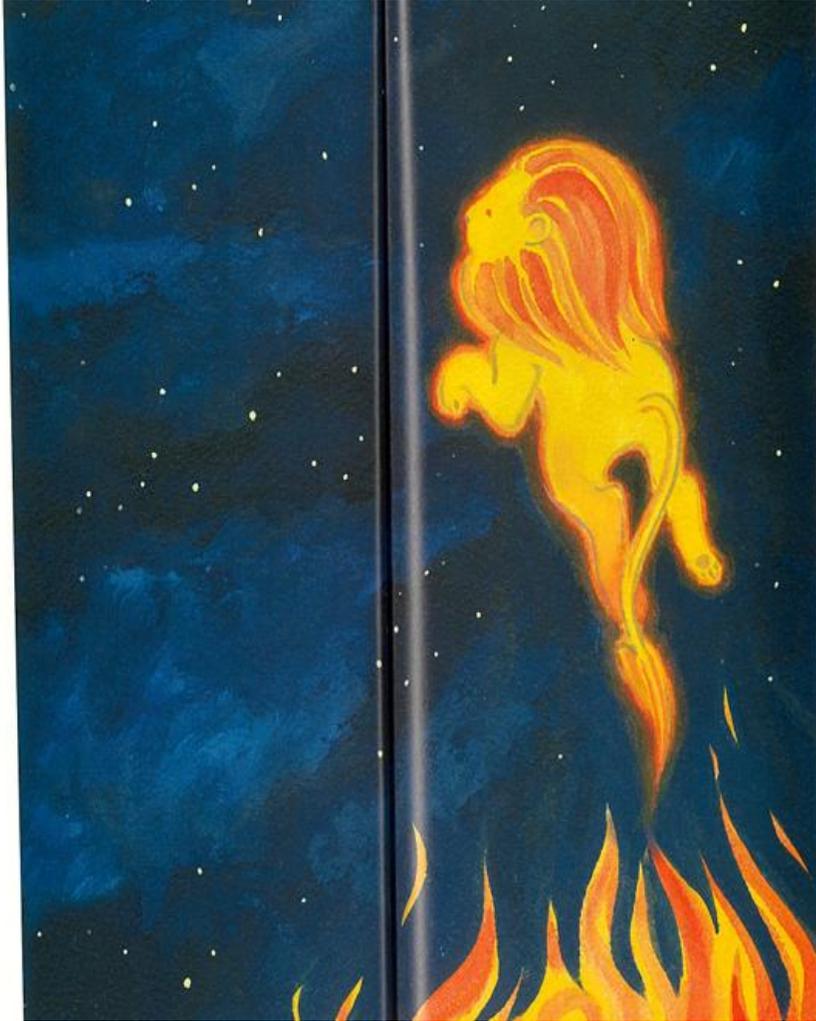


「新編新しい国語三上」(令和6年版)の最後の場面の挿絵

のすがたはどこにもなかった。

やがて、人々の前に、ひとかたまりのほのおがまが上がった。そして、ほのおはみるみるライオンの形になって、空高くかけ上がった。ぴかぴかにかがやくじんざだった。もう、さつきまでのすすけた色ではなかった。

金色に光るライオンは、空を走り、たちまちくらやみの中に消えさった。



次の日は、サーカスのおしまいの日だった。けれども、ライオンの曲芸はさびしかった。おじさんは一人で、チタツとむちを鳴らした。

五つの火の輪はめらめらともえていた。だが、くぐりぬけるライオンのすがたはなかった。それでも、お客は一生けん命に手をたたいた。

ライオンのじんざがどうして帰ってこなかったかを、みんなが知っていたので。

「サーカスの外の世界」の場面と②の「サーカスの中の五つの火の輪の場面」が見開きになっている。また「五つの火の輪の場面」の挿絵がない。

ページをめくると、最後の場面(サーカスの中の五つの火の輪の場面)の文章と挿絵が見える→最後の場面に気づきやすい

## 平成30年版の教科書「新編新しい国語三下」(東京書籍)の挿絵

『教師用指導書』によると、『サーカスのライオン』は「時」で場面分けをしている → 第一場面から第五場面



第一場面の挿絵



第五場面の挿絵

「時」で場面分けをしても、平成30年版の教科書の挿絵を活用すると、子ども達は**第一場面**と**第五場面**の挿絵を**対比**することで、『サーカスのライオン』は〈サンドイッチ構造〉の作品であることを理解する一助になる



## 「学習の手引き」を子ども達が楽しく考える言語活動例の評価基準(例)

- レベル1 「じんざへのひと言メッセージ」と選択した人物の心境について二つとも書いていない。
- レベル2 「じんざへのひと言メッセージ」と選択した人物の心境についてどちらかを書いている。
- レベル3 「じんざへのひと言メッセージ」と選択した人物の心境について二つとも書いているが、**じんざが輝く金色になった意味やじんざは心の中で生きている記述がない。**
- レベル4 「じんざへのひと言メッセージ」と選択した人物の心境について二つとも書いている。**じんざが輝く金色になった意味やじんざは心の中で生きている記述がどちらから一つある。**
- レベル5 「じんざへのひと言メッセージ」と選択した人物の心境について二つとも書いている。**じんざが輝く金色になった意味だけではなく、じんざは心の中で生きているなどの二つ以上の記述がある。**

「じんざは死んでしまったのに、サーカスは続けられています。心の中でどのようなことを考えていたと思いますか。」  
について理解できているのは、「レベル4」以上になる。（「男の子」を選択した場合も「レベル4」以上になる）

# ご清聴ありがとうございました

中野登志美(2020)「文学教材の比べ読みにおける有用性の検討  
ー川村たかし『サーカスのライオン』と宮沢賢治『よだかの星』を例にしてー」  
(「論叢国語教育学」第16号、広島大学国語文化研究室)を加筆訂正した。

